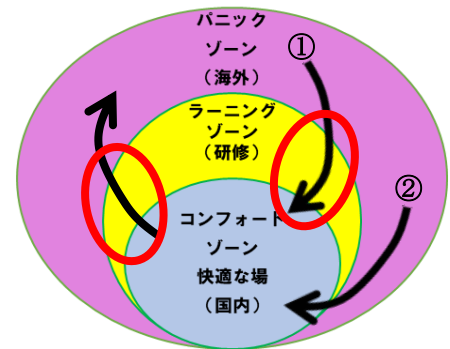


# ☆派遣教員はいかに異文化体験をカリキュラム化できるか？☆

## 【国際理解教育の目標シートがなぜ必要なのか】

在外教育施設に派遣され、海外で仕事をするということは、国内の学校環境とは全く異なります。派遣教員が、海外体験を「まるで夢のようだった」とよく表現します。

しかし、帰国後、自分の体験談がそれほど求められていないことに失望します。また、長い海外暮らしで、どうしても国内環境に違和感を感じてしまいます。実は、海外で獲得した知識や能力を国内で生かすのは、非常に難しいものなのです。



右の図を見てください。国内という快適な場から派遣された海外では、すべてが未経験で、まさにパニックゾーンと言えます。海外派遣前には、全員が研修（ラーニングゾーン）を通過しているのに、帰国時には②のようにいきなり国内環境（コンフォートゾーン）へ戻ってきます。

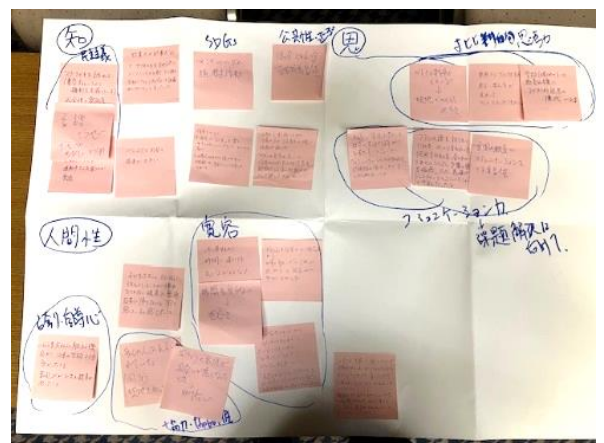
全海研では、②ではなく、①の十分な研修（ラーニングゾーンの通過）の必要性を訴えています。

- A 帰国者が直面する心理的な落胆や混乱は、実は予測されることで、多くの研究で立証済みです。客観的な知識として心の準備をしておけば、かなりリエントリーショックは軽減されるでしょう。
- B また、海外体験を国内で活用するには、在外教育施設で課題解決に追われた記憶を、改めて整理して、国内の教員にも理解できるよう教育目標から説明できるようにする必要があります。
- C 最後に、海外の教育を見聞し、その先進性に驚いたならば、それを新たな教育観や指導観として国内で発信できるように、自分の考えをまとめ、関連情報を収集して、きちんと消化しなくてはなりません。

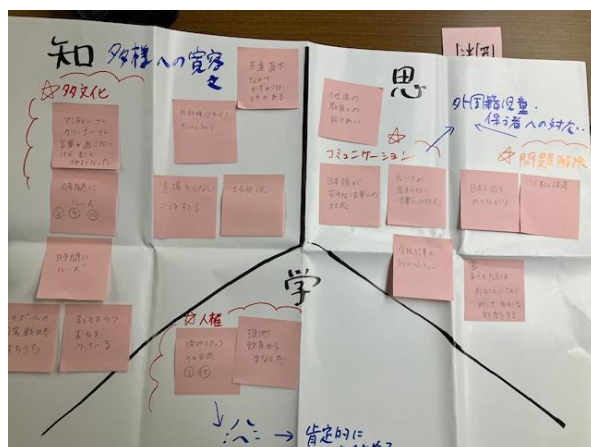
ここでは、Bの課題について、ワークシートを準備しました。帰国後に、少し時間をかけて、自分が海外でやってきたことを、土産話ではなく、国内実践への提案として受け止めてもらえるよう、活用してください。

## 【まず海外体験振り返りシート①を使ってみよう。】

- ・異文化での経験の中で、帰国後報告したい印象的な実践や考えを、中央の付箋スペースに書き込んでみよう。もしも、スペースが足らなければ自分で付箋を用意して書き足してみてください。
- ・書き終えたなら、自分の考えや実践、体験が周りにある17の国際理解教育の目標のどれを目指していたものかを検討してください。実際に付箋を動かしてみると、自分の実践や体験が複数の目標を目指していたことにも気づくはずです。
- ・17の国際理解教育の目標は、「知識」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の3つの観点ごとに分かれています。この3つの観点にまんべんなく、自分が選んだ目標が含まれているかがポイントです。もしも、ひとつの観点で見当たらなければ、その観点の目標から自分の実践や考えを振り返ってみましょう。



- ・思考力等・学びに向う力の目標がない場合は、まだ自分の体験を「知識」レベルでしか振り返っていないということです。体験や活動の中で、思考したり、判断したり、それらを表現したことがあるはずですが、また、その意味や意義、価値などについて考えたはずですが、30年前の体験や活動でも、十分吟味に耐えられます。「こんな力使っていたのか」「こんな教育観を持っていたのか」という振り返りに必ずたどり着くはずですが。
- ・この作業は、一人でやるよりもグループで取り組むと新たな発見が生まれます。右の写真は、そんな取組の様子です。
- ・また、17の目標に該当しない、自分なりの目標が在ったならば、そこにも自分の実践を結び付けておいてください。そして、その目標を自分だけのものにせず、他の教師と議論してみることで、新たな視点が浮かび上がるかもしれません。



## 【国際理解教育目標シート②を使って、国際理解教育の目標から国内で新たな実践を提案しよう。】

- ・海外体験振り返りシートが完成したら、自分の考えや実践、体験が、17つの国際理解教育の目標に分類されると思います。その中から、自分が特に強調したい目標を5つ選んで、そのエピソードと一緒に国際理解教育の目標シートに書き込んでください。ただし、3観点がすべて含まれることが大切です。
- ・「2」の番号欄には、「1」の欄の国際理解教育の目標の番号を、そして右の欄には自分の体験や実践、考えを書き込んでください。
- ・もしも、海外生活の中での指導観や教育観が変化したならば、それも書き留めておいてください。
- ・最後に国内で実践してみたい目標を新たに考え、具体的な取組を書き込んでください。この形にまで持ってこれれば、国内の先生方にも自然に提案ができるはずです。自分なりの「大きな国際理解教育の目標」を持っていると、さらに確かな参照軸が生まれると思います。
- ・いくつかのシートの記入例を添付しましたので、ぜひ参考にしてください。

## 【帰国報告を見直そう】

これまでの帰国報告は、散文的な旅行記だと思います。体験人だけにしか伝わらない「見聞録」であって、国内の実践を喚起することはできません。なぜなら、それはあくまでも「海外だからできたこと」の一言で片づけられるからです。「海外にはこんなおいしい卵料理がありました」という報告だけでなく、「おいしい卵料理を作るための新しいヒントが海外にありました」というような提案としてはいかがでしょうか。

そのために、国際理解教育の目標シートを使って、自分の体験や実践を見直し、国際理解教育のどんな目標を目指していたのか、それを国内でも実践するにはとといった問いかけが必要です。国内の教師と国際理解教育を協働できる、さらには教科を越えた汎用的な力を協働して育てていけるよう期待しています。